

関西大学における国際教育カリキュラムを担う教職員のFD/PD Faculty/Professional Development Initiatives for International (English-Mediated) Curriculum at Kansai University

池 田 佳 子

要旨

Knight defines internationalization as “the process of integrating an international and intercultural dimension into the teaching, research and service function of the institution” (1994: 7). This paper reviews briefly on the global current development in international education, particularly focusing on various aspects encompassing internationalization of curriculum in the home institution. Establishment of the EMI (English Mediated Instruction) programs is certainly an important step forward for internationalization at home (as known as “IaH”). Yet still, the paper argues that faculty should be acknowledged as the stakeholders who are most responsible for internationalizing the curriculum. The latter half of this paper reports on some of the faculty development/ professional development endeavor which Kansai University has worked on just recently and it also provides some future plan for more opportunities for faculties and staffs on campus to see and feel that IaH is an important agenda for their own career development.

キーワード 英語開講カリキュラム、教職員トレーニング、プロフェッショナル・ディベロップメント、国際教育／English-Mediated Curriculum, Faculty Training, Professional Development, International Education

1. はじめに

日本国内の大学の国際化は、どのような機関であったとしても何等かのスケールで進めていく必要がある。Knight(1994)では、教育の国際化とは、教育機関の様々な機能、研究、そして教育において国際的な要素、または異文化を意識づけた側面が加味される過程であると定義されている。大学教育の根幹を成すものは、教育カリキュラムである。そのカリキュラムを国際化しなければ、真に大学が世界的な通用性を目指すことはできない。しかし現場において、このプロセスは容易なものではない。Internationalization of Curriculum (カリキュラムの国際化) は、単に教育の言語媒体をたとえば日本語から英語に転換するだけで解決するものではない。Global Teacher Education のある記事では、カリキュラムの国際化、はその教育を担う者(faculty)の視点、価値観、そして彼ら自身のグローバルコンピテンシーの転換を行うこと

であると述べている。

関西大学が目指す国際化されたカリキュラムは、Whalley (1997, 2000)等でも同様の定義があるように、国内の学生および国際学生らがインターカルチャル、マルチカルチャルな場面において主体的に行動できる(本学の場合「考え」、「行動する」、「考動できる」として表現される事が多い) 人材の養成を可能にする教育である。この人材養成を遂行する上で、最も学生に影響を与え、国際化されたカリキュラムの本来の目的を具現化させることができるのは、教育者自身に他ならない(Bond, 2003). 本学においても、他大学の進展同様、英語で開講する科目群(KUGF Kansai University Global Frontier カリキュラム)の拡充を急ピッチで進めているが、これらの試みはそれだけではあくまでも「外枠」であり、環境づくりの一部以上のものにはならない。これらの新設された科目の中で、日々学生と接し、「国際化された授業」、「国

際化された教室」を作り出すのは、その中でどのような教授がなされるのかにかかっている。平たく言えば、大学教育の国際化は、教育者自身の国際化と、彼らと与える学生達への影響力が大きな鍵を握っているということである。

この認識の下で、関西大学では平成 26 年度に新たな国際化構想、「トリプルI構想(Intercultural Immersion Initiatives)」を構築し、その中で、国内における教育の国際化(Internationalization at Home 以下 IaH)を第一優先とすべき課題として位置付けている。日々のキャンパスライフにおいて、多様な文化背景を持つ者同士がプロジェクトを共に遂行し、多様な意見を交換・交渉しながら、生産的な結果を出していく、といった「異文化コミュニケーション」を体験し、その経験をきっかけとして、近い将来自らの意思で海外留学派遣へと一歩踏み出す勇気と自信を涵養することが、IaH を推進する重要な目的である。平成 26 年度に 6 つのモジュール(テーマ別英語開講専門科目)と語学スキルアップや異文化コミュニケーション能力の基礎の養成を主目的とする Global Liberal Art Unit からなる KUGF(Kansai University Global Frontier)カリキュラムが新設され、3 年目を迎える平成 28 年度には、新たに「グローバル科目群」として全学部共通教養科目に位置づけると共に、2 つの新モジュール (Applied Sciences and Engineering 「応用科学と工学」と Fundamentals of Social Sciences 「社会科学の基礎」)を加え、よりカリキュラムとしての科目数と専門分野の範囲を広げる展開となった。IaH は英語開講科目カリキュラムの増設のみに留まるわけではない。キャンパス内で留学生と日本人学生が日々交流できる機会を設けるため、平成 27 年度秋学期からは Mi-Room(マルチリンガルイマージョンルーム)を千里山キャンパスに設置、学生達が自由時間に足を運び外国語で会話し、学び、グループプロジェクトなどを行うことができる空間として目下充実を図っている。今後千里山以外のキャンパスにもこの Mi-Room の活動は展開していく。

このように、IaH を推進する上で、看過できないのが、その推進を担う人材リソースである。教員・職員、そして多様なアウトリソースとの協業などの多側面における議論がここでは可能だが、まず本稿では、先述した国際化されたカリキュラムの重要な担い手であり、成功の鍵を握る教育者(faculty)のプロフェッショナル・ディベロップメント(PD)及びファカルティ・ディベロップメント(FD)の試みについて報告を行う。また、可能な範囲にて、今後のグローバル FD/PD のあり方についての展望についても言及することで、本稿を一読いただく教職員の方々が一人でも多く関心を示し、今後提供していく活動に参加してもらいたいと心より願っている。



図1 千里山キャンパスの Mi-Room の様子

2. グローバルFD 第一弾：CLIL から学ぶ英語を介した教授法トレーニング

平成 26 年度における国際教育のための FD/PD の第一弾として、7 月末の 5 日間 (7 月 20 日～25 日)の集中トレーニングワークショップを開催した。このワークショップは、CLIL (クリル/Content Language Integrated Learning 内容言語統合学習)と言う、専門科目教科を語学教育の方法により学ぶ教授法を実体験しながら理解していくというものであった。クィーンズランド大学所属の ICTE(Institute of Continuing & TESOL Education)から講師を特別に招聘し、今回のワークショップを行った。CLIL の手法を応用すると、効率的かつ 深いレベルで専門内容を修得し、また

英語を学習手段として使うことで、4技能はもちろんのこと、批判的思考力やコミュニケーションにおける実践力を伸ばすことができるため、一般的な学習スキルの向上も期待できる。CLILは、外国語教育の様々な教育原理・技法を有機的に統合することで、高品質な授業の実現を目指す(池田真 2011)。CLILの基本原理は言語教育に基づくが、日本国内の環境において、専門科目を英語で教授する場合、多くのケースにおいて日本人学生と国際学生が混合した履修者を対象とする教室が対象となるため、多言語支援や、日本語と英語をどれぐらいの比率で、またはどのようなチャンネルで応用しながら学習者の最大限の学びを引き出せるのかそれぞれの講師が思案しなくてはならない。池田真(2011)の以下の抜粋図からも見て取れるように、英語を用いて教授すると言だけでは総括できない。授業の目的が「Soft CLIL (英語教育)」と「Hard CLIL (科目教育)」が対極にあり、その間に様々な英語を介した授業のあり方が可能となっている。本ワークショップにおいても、本学に所属する英語教育の専門家の教員もいれば自然科学科目を担当する教員も参加しており、それぞれが個別のCLILのとらえ方をすることができた。CLILをどれぐらい通常の科目運営に取り込むか、という点でも、Partial CLILとTotal CLILが両極で、様々な比重が考えられる。使用する言語においても、多くの学生にとって母語となる日本語を全く使用しない Monolingual CLIL と Bilingual CLIL があり、日本語を交えつつ行う授業も排除するものではないことがわかる。



図2 CLILのタイプ分類(池田真 2011)

3. CLIL ワークショップ総括

UQによる今回のCLILワークショップは、合計16名の関西大学の参加者らを対象に行われた。Teacher development programのカリキュラムは、まず第一日目にCLILとは何かを理解することから始まり、二日目以降は英語を用いた授業ではありながら、学習者の内容理解のプロセスを能率良く支援する様々なメソッドや教授の工夫などについて実体験しながら進められた。

Kolb(1984)の「the experiential learning cycle 体験型学習のサイクル」、VAK Classification (Fleming)などの学習スタイルに関する文献とその応用など、教授法の背景となる根拠についても言及しながら、参加者である教員とワークショップの講師が互いに意見を交換しながら、活発な活動が連日展開した。

学習者間の学び(ピア学習)を促進する際、教室環境も非常に重要な要素となるが、図3に示すように、ワークショップ中は始終3名から4名の専門分野の異なる教員たちが対面で着席し、次から次へと提示されるチームベースのタスクに取り組んだ。



図3 ワークショップの様子

ワークショップの中で最も有益だと筆者が個人的に感じたのは、学習プロセスを多様な理論をベースにわかりやすく説明する Focus on Pillar 3: Chunking and repackaging knowledge/ Fostering creative and critical thinking のセッ

ションであった。例えば、この日は新しい知識やスキルを学ぶ上で、認知プロセスを LOTS(Low Order Thinking Skills)と HOTS(High Order Thinking Skills)の二層に大別し、どのような授業ない活動が LOTS と言われる作業であり、徐々に学習者のスキルを伸長する上で HOT に該当する活動へと足場を作り進めていくべきかを具体的な例をもって理解していった。学習者に提示する質問の構築デザイン一つとっても、新情報を覚える>理解する>応用する>分析する>評価する>創造するといった認知スキルの順序を意識するだけで、同じ講義内容一つを取っても学生の学びは大きく異なってくる。

筆者を含め言語教育に携わる者は、この認知の段階についてトレーニングを基礎知識として受け、さらにそれらを踏まえた教育法の訓練を受けることが通常であるが、他分野においてはこのような教授法のトレーニングを受ける機会は少ないのではないだろうか。また、同じ大学で教鞭をとる「同僚」であり、勤務歴が長い者もいる中、多くの参加者が異なる学部に所属する教員であるため、初対面である者もいた。互いの分野において、英語で教授する環境や事情などを赤裸々に情報交換する場としても、本ワークショップは大変有意義であったといえる。

日本国内の大学において英語で専門科目を教授する場合、教師が対峙する履修者は様々である。日本人学生と留学生がほぼ半分の比率で混在する教室もあれば、留学生が若干名で大半が日本人学生である場合も多い。日本人学生らが英語を介して専門分野の未知の情報やスキルを習得しなければならない場合、語学面の不自由さが阻害要因となり、本分である専修の学問が身につかないのではないか。このような不安を抱えつつも、英語で開講する科目の拡充は、文部科学省が推進する大学の国際化・グローバル化の最優先課題として位置づけられているように、今後も進めていかざるを得ない。留学生だけにこれらの英語開講科目を提供するのも一つのオプションではあるが、本学

が、そして日本全体がそもそも国際化したいのは、すでに日本という外国へ一歩踏み込む勇気と国際性を持つ留学生達だけではなく、むしろ世界へと目を向ける視点を未だ持っていない（ことが多い）日本人学生ではないのだろうか。それならば、日本人学生達が留学生達と参加し互いの文化が混合する環境にて科目開講をする道を選ぶべきだろう。CLIL ワークショップは、このような多様性や諸事情にも対応できる教授法を具体的に実体験し、それぞれの教員がその意義を再確認する機会となったことを願うばかりである。

4. 今後の展開

平成 27 年度の第一回目の試みにおいて、参加者の評価や感想を反映させるとともに、本学の国際化戦略委員会の小部会であるグローバル教育・FD 部会メンバーによる参加型観察の結果を踏まえて、次年度以降の FD/PD 活動を以下のように展開するべく目下尽力中である。

まず、各学会毎に CLIL グローバル FD ワークショップを開催（年間延べ 4 回程度）する。応用言語学・英語教育の豊富な経験を持つ特別任用教員 3 名による CLIL をベースとした教授法のワークショップを 1 日～2 日間程度の集中トレーニング形式にて提供するものである。各専門分野において役立つ教授法、CLIL が推奨する活動例などを実際に体験しながら学ぶワークショップとする。

これに加えて、各学期において隔週で英語講義のための PD セッションを実施する。関西大学では平成 27 年の秋学期から語学学習や異文化コミュニケーションの機会を提供する空間「Mi-Room」（マルチリンガル・イマージョンルーム）を設置している。また、平成 27 年度の私立大学整備事業補助金の採択（タイプ C：グローバル化）を受け、千里山キャンパス内に平成 28 年度より新たにグローバル教育支援活動を行う支援室（「国際教育支援室（仮称）」）を設置することとなった。これらの空間をフル活用し、教育職員に参加が限定される英語で授業を行うための語学トレーニング

セッションを開催する。7月のCLILワークショップにおいても、「もっと頻繁に語学を鍛錬する場がほしい」といった要望が寄せられた。単に会話を練習するような場ではなく、英語で授業を行う上で必要となるコミュニケーション能力、アカデミックレベルの交渉力などを実践的にトレーニングする場として提供していく。

英語開講クラス担当者をサポートする教員のためのアドバイジング及びサポートの提供を行うことも、平成28年度の事業計画の中に入っている。英語での授業開講に近い将来計画している教員のために、専門家による指導設計やシラバスデザイン、CLILの視点を応用した学びを引き出すことができるタスクの考案などの作業を支援する体制を整備し、先述の「国際教育支援室」にて予約制にて開始する。「国際教育支援室」では、ICTツールや教室空間を模擬的に設置したスペースが設けられ、そのスペースにて新たに考案したタスクや活動を試行的に実施して、同僚や専門スタッフからフィードバックをもらうといったことが可能になる。

これらの試みは、参加する教員が積極的に行動しなければよい成果を期待することはできない。気軽に、そして多忙な教員達のスケジュールの合間にも参加できる便宜性の向上を意識し、かつそれぞれのニーズに慎重に耳を傾けながら、今後もグローバル教育の推進につながるFD/PDを展開していきたいと考えている。

6. 参考文献

- 池田真(2011)「CLILと英文法指導：内容学習と言語学習の統合」、『英語教育』、2011年10月号。
- CLIL Japan Homepage
<http://www.cliljapan.org/%E3%83%96%E3%83%AD%E3%82%B0/> (Last access 2015-11-18)
- Global Teacher Education. Professional Development for Global Teaching and Learning.
<http://www.globalteachereducation.org/professional-development-global-teaching-and-learning> (Last access 2015-11-18)
- Knight, J. (1994) Internationalization Elements and Checkpoints. Canadian Bureau for International Education. Research Monograph No.7. Ottawa, Canada.
- Kolb, D. A. (1984). Experiential learning: Experience as the source of learning and development (Vol. 1). Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Whalley, T. (1997). Best practice guidelines for internationalizing the curriculum. Ministry of Education, Skills, and Training and the Centre for Curriculum, Transfer, and Technology, Province of British Columbia, Victoria, British Columbia, Canada.

池田佳子（関西大学国際部）

¹ [http://www.globalteachereducation.org/professional-development-global-teaching-and-](http://www.globalteachereducation.org/professional-development-global-teaching-and-learning)

learning (last accessed: 2016.01.31)